

中電・JR病院分娩休止

18年度 広島大派遣医削減

広島市で産婦人科を持つ中電病院(中区)とJR広島病院(東区)が2018年度、分娩を休止することが9日、分かった。常勤医師を派遣してきた広島大大学院の産科婦人科医局(南区)が、産科医の急減に対応して両病院への派遣数を減らすため、両病院はすでに妊婦の受け入れを制限している。同医局は「医師が減る中、広島県全体の分娩態勢を維持するためにはやむを得ない」と理解を求めている。32面に関連記事。

(馬場洋太)

「県全体の態勢維持」

中電病院は4月以降の分娩休止を決め、すでに出産予定日が3月1日以降の妊婦の予約を受け入れてい

ない。JR広島病院の休止は7月で、6月1日以降が予定日の妊婦が対象となる。両病院の産科医は、広島大大学院の産科婦人科医局が派遣し、診療に当たっている。昨年度の分娩数は、中電病院が419件、JR広島病院が263件の計682件。広島市の昨年の出生数(1万586人)の6・4%に相当する。

夜間や休日の分娩にも対応するため、複数の産科医が交代で勤務する必要があるが、同医局からの派遣が減れば、分娩を続けられなくなる。JR広島病院は「昨年病院を建て替えたばかり。産科医を公募で招いても分娩を続けたい」とするが、見通しは立っていない。

同医局によると、県内の



病院に派遣するなど医局の人事が及ぶ産科医は今年4月時点で約90人いた。定年退職や開業に伴う独立などが相次ぎ、来年4月には80人を下回る見込みという。

工藤美樹教授は「広島市には開業医を含め分娩施設が多く、余裕がある。県全体で地域のバランスを取るには広島市を集約するしかない」と説明する。

広島県によると、県内で分娩できる病院や診療所は10月時点で53カ所。10年間で21カ所減った。竹原、府中、庄原、大竹、江田島の5市と、熊野、坂、安芸太田、大崎上島、世羅、神石高原の6町には、分娩できる病院や診療所がない。

鈴峰今中医院(西区)の河村慎吾院長は「2病院が休止しても、広島市周辺で直ちに『お産難民』が出る状況ではない。ただ、従来より分娩の予約が取りにくくなる可能性はあり、母子手帳を取得した段階での予約を勧めたい」と語る。

県産婦人科医会会長で、